［会長講演］

吉益東洞と瀧鶴台
――東洞の思想的背景――

山崎　正寿
漢方京口門診療所所長

はじめに

吉益東洞の医説は，古医方への復古を誰よりも先鋭的に且つ独自性をもって主張した．それだけに人々に賛同と敵視の劇しい評価を作り出した．19歳頃から37歳まで過ごした広島時代に，寝食を忘れて学んだ医経や古書から得た結論は，京都に出て広く人々の中で訴え，それまでの医療を大きく変えなければならないという使命感を持つに至った．入京後，数年の厳しい生活の後，世に受け入れられるようになり，多くの弟子達に慕われても，東洞自身の医説をどれほど理解してくれたのか確信を持てなかった．だが京都における人々との交流の中から，確かな理解者を得ることができた．それが荻生徂徠の古文辞学派の人達であった．特に山縣周南とその弟子である瀧鶴台である．東洞とこの人達の関わりについて触れたいと思う．

江戸時代の儒学の変遷

江戸時代は武士・町人に限らず知識階級の学問的素養は儒学にあったと言えよう．しかし，儒学といえども一括りにはできない．

徳川家康開府の際の思想的背景になったのが，僧侶から儒学者になった藤原惺窩，その弟子の林羅山らによる朱子学である．朱子学は中国宋代周濂溪，程明道・程伊川らによって開拓，発展された宋学を，朱熹によって，孔子の教えを理論体系化したものであり，四書（論語・大学・中庸・孟子）を重んじて，理気二元説，性善説などを説き，修身斉家が治国平天下の基礎であるとし，公式主義，厳格主義，教条主義などと解される．所謂，宋儒学派である．

こうした初期の儒学にたいして，徳川幕府も進んだ頃に，京都の伊藤仁斎・東涯が孔子・孟子の古義に基づく儒学を主張し始めた．朱子学の言う性善説・完全善を否定し，人間の個性や主体性・多様性を認め始めた．「仁」は慈愛の心であるとし，我邦，独創の儒学を生み出した．いわば幕府の官学から，町人の哲学であり，武士だけでなく公家，町人，医者などにも多くの賛意する人々を生んだ．所謂，古義学派である．

この儒学の古義派にたいして更に荻生徂徠は，朱子学の理を重んじ，議論に終始する儒学から，中国の周から前漢までの古言（古文辞）は，宋を中心とする後代の文章語とは根本的に異質であり，古代の「心」を得るためには，古言を尊重すべきであるとした．古文辞学派とも呼ばれた．古文辞は詩の言語に通じ，古文辞に現わされるものは事実そのものであり，古代の事実は人間の事実の原形であるとし，六経（易・書・詩・礼・春秋・楽）と論語を重んじた．そして修身斉家は私的なもの，治国平天下は公的なものと区別し，徳川綱吉，柳沢吉保，徳川吉宗などに尊重され，徳川幕府中期の武家の主要な思想となった．護園学派とも呼ばれ，安藤東野，山縣周南，服部南郭，平野金華，太宰春台など優れた弟子をもち，徂徠没後も徂徠派は隆盛を誇った．

このような朱子学から古義学，古文辞学と変遷した儒学は，後代（宋）に創作された孔子の教えの理論化から，改めて本来の孔子の教えに復帰するという，いわば復古主義の流れを作り出し，またその実証的精神は儒学に止まらず，多方面に影響を及ぼしたといえる．初めは朱子学を学んだ本居宣長は，やがて国学の創設につながる．

江戸期の医学における復古主義と東洞

医学の世界でも儒学の復古に先駆けて，後代（金・元時代）に創設された後世派医学，則ち陰陽五行論（宋学）を中心にした理論派医学から，傷寒雑病論に基く古方派医学が，中国の明末に起り，方有執の「傷寒論条弁」，清初の喩昌の「傷寒尚論篇」などが著された．その影響を受けた本邦の名古屋玄医や後藤昆山の古方への回帰は，こうした伊藤仁斎や荻生徂徠の出現に先立つものであった．特に後藤昆山は同じ京都の伊藤仁斎の古義学に傾倒し，弟子を仁斎の門に入れさせたりしている．

吉益東洞は儒学や医学の復古主義の回帰を求める時代の中で生まれ，若き広島時代（37歳まで）に医家を志し，先祖の吉益半笑斎由来の吉益流金瘡産科の治術を受ける．しかし金瘡産科に止まらず，広く医経の黄帝内経，難経，傷寒雑病論，病源候論，千金方，外台秘要ほか，後世の劉張李朱の金元医学まで学んだばかりでなく，周易，尚書，詩経，礼記，論語，呂氏春秋，史記など諸子百家をもひも解き，医学にかかわることを研究し，その中から独自の医説を見出した．その医説の主要なる点は以下の如くである．

一，「夫れ空談虚論は徒に事実を害す．医は唯だ病を治す．病を治せざるはなんすれぞ医者たるや．故に治術を獲るを以て務めとなす」［古書医言］

—陰陽五行論による病因を論じ，診候を忽せにし，師伝のみ受け継いで，自ら研求することのない医学を否定し，黄帝内経素問・霊枢，病源候論，千金方以下金元時代の医学は治療に益なしとした．傷寒雑病論すら後世の説を混じ，「仲景は真の仲景に非ず」とまで言った．

一，「夫れ疾医は万病唯一毒という事を疑いなく会得し，此薬方にて此の病毒解するという事を心に覚ゆるゆへ，病治せざる事なし」［医事或問］

—万病一毒の説は後藤昆山の一気留滞と結びつける人もいるが，東洞自身は呂氏春秋の盡數篇や達鬱篇や傷寒論から導き出された医説であると記している．そして病を治するの法は，邪の湊る所を視て，毒の在る所を察し，其の証に随って方を処する．病名病因に拘わらず．此れ則ち仲景の教えなり．と述べている．

一，「書に曰く，若し薬瞑眩せざれば，厥の病瘳えず」

—人の疾病があれば，毒薬を以てその病毒を攻め去り，その正を復す．若し，疾病無くして之を攻めれば，反ってその正を害す．すなわち病を攻めるは毒薬を以てし，精を養うは穀肉果菜を以てす．

一，「実見無くして用うは則ち迷の端なり．実見とは何ぞや，自ら為して之を実得す．則ち是なり」

—親試実験

一，「蓋し死生は醫の與らざるところなり．疾病は醫當に治すべきところなり．故に曰く人事を盡して天命を待つ」

—昔，扁鵲は虢の太子が暴蹶にて死せるを，療治して蘇らせる．扁鵲云く自分は死人を能く生かすに非ざるなり．此れ自ら當に生くべき者，自分は能く人をして起たしめるのみ．

これらの医説は，誰かの師について学んだことでもなく，若き日に東洞自らが種々歴代の醫書をひも解き，秦漢以前の諸子史や古言を研究して到達したものである．周礼，書経，呂氏春秋などの古言を重視し，理を廃し事実を重んじ，人事と天命を区別しする姿勢は，図らずも荻生徂徠の古文辞学の思想に近似していると言える．

東洞と古文辞学派

若き広島時代に，徂徠派の古文辞学に接した形跡はなく，むしろ三十七歳で京都に出たときは，広島

藩の朱子学に深く関わっていた堀景山を頼っている．そして京都で山脇東洋に引き立てられ，三條通東洞院で盛業となったころに，荻生徂徠の高弟であった長州の山縣周南の弟子達と交流をもつようになった．その一人が山縣周南の弟子で，東洞と同年に近い長州の瀧鶴台である．

瀧鶴台は吉益東洞より七歳年下で，長州萩藩の大工の子として生まれるも，学問好きで，請われて御客屋付医師の瀧養正養子となり，医術を学ぶも，十四歳で萩の明倫館に入学，当代一流の学者である小倉尚斎，山縣周南について儒学を学んだ．萩藩家老毛利広政の下で時観園の教授を拝命．更に江戸遊学となり，山縣周南の友人でやはり徂徠学派の高弟服部南郭に入門．その後瀧鶴台の名は江戸に於いて高名となり，山縣や服部の同じ徂徠学派の太宰春台には，「西海第一之才子」と賛辞を受けた．その後長崎に遊学したり，再び江戸に出て，米沢藩の上杉鷹山や大和小泉藩の片桐貞芳には師として講義を行った．儒医としても「宋後の方論をいさぎよしとせず，ひそかに古方を左祖するもの久し」と述べ，早くから古医方を行なっていた．京都滞在中には香川修庵，山脇東洋，吉益東洞と親しく交わっていた．

東洞と古文辞学派の人達への書簡から，その交じわりの深さを知ることができる．

東洞が京都に出てようやく認められ東洞院に転居した頃，延享四年（1747）に門人の鶴元逸が先生の医説を輯集して「醫断」を著した．一たびこの書が現れるや，賛否両論が並び起こった．この時にあたり東洞は徂徠学派の巨頭であり，友人の瀧鶴台の師である山縣周南に尺牘を送っている．それには，「初め僕，劉張李朱の術を為す，而るに病治せず．乃ち更に王燾，孫思邈を為し，仲景を為す，而して猶お未しなり」と述べ，これらの医経を離れてみると，「是に於いて古今治の異とするを知る．乃ち古訓を学び獲る有るを信ず．遂に古を好む」と述べ，「故に素霊中の古言，及び秦漢以上の醫語を撰び集め，治と道を同じうして，亂と事を同じうせず．古を用いて今を御す」そして「二千年来祖述憲章すべき者無し．遂に乃ち我より古を作る．僕甚だ焉に惑す．儻は所謂古訓に由って是か非か」迷うところであるが，「徠翁先生，其れ古訓に由らざれば法言に非ず敢て道ならず」と言われている．山縣周南先生には「序二篇，尺牘三篇を送り，欽しんで帳前に奉る．庶幾は高明一顧，直ちに其の是非を指示し，我れ儔小人と為す，歯牙の餘論を嗇む無きを幸甚とす」と，周南先生に東洞の医説の是非を訊ねている．こうして周南先生に意見を伺うのも，先生の門人の瀧鶴台を始め三人の友人との交流があったからであると述べている．

東洞のこのような行為は，多くの門人達も自分を敬い，医説を理解しようとしてはいるが，本当に理解できている者がどのくらいいるであろうか．という疑問も抱いていたことになる．それは東洞とほぼ同年の俊秀の儒者であり医師である瀧鶴台との交流の中で明らかになる．瀧鶴台の手紙のやり取りや，東洞の著書によせた序文にその心情が表されている．

寛延四（1751）年，山縣周南先生が東洞の治療を受けに京都に来られた後，瀧鶴台に寄せた手紙に，周南先生が元気で淀川の舟遊びをされたことを喜ぶとともに，「嚮に曾子泉一人（鶴台のことか）を得て焉を驩ぶ．今年先生の足下に拝謁し，肺肝を吐露し，其の是非の當を與に聞くを得．賢師友を得ること誣うべからざるなり．醫断の気病の論，仲景の意に齟齬する所有り．故に改め以て正を請う．且つ一言冠するを冀う」として，周南先生と鶴台氏との交わりを心から喜び，東洞の医説を記した「醫断」に意見を求めてもいる．

また東洞の治験録である「建殊録」の付録にある東洞と鶴台の治術にかかわるやり取りの中でも，「足下（鶴台）の論実に然り．世人嘗て余説を聞く者は，面諛腹非，一人として與語すべき者無し．足下の如きは知音と謂うべし」と，あの激しい東洞が最大の賛辞を送っている．

瀧鶴台も儒者でありながら，誠実な医師として多くの人を診療していた．古言を重んじ，事実を見る古文辞学派の人々との交流，特に瀧鶴台との交流は東洞の医説のみならず思想的背景となっていたと考えられる．